

より医療に貢献する診療放射線技師に

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 小川 清



年度末に本会事務所の資料整理をしていたところ、「放射線科専門医会ニュース」のコピーが出てきた。その内容は放射線医学界の大御所が、診療放射線技師について好意的に書いていた。

通常、現役時代の教授の立場、学会の立場から診療放射線技師に対し厳しく指摘することが多いが、組織を離れると随分とやさしくなったなと感じる。この投稿では「放射線科医の将来性」というタイトルの中で、診療放射線技師について触れていた。要約すると、新しい画像診断技術があるうちは、専門性が保持できるが、普及すると専門性が低くなる。CTやMRIが登場し技術革新している時は、専門家としての存在感があるが、装置が普及し、性能が上がり、使いやすくなってくると技術は普遍化する。そうなると画像診断は放射線科医のみならず、診療放射線技師がやる局面が大きくなる。診療放射線技師が勉強と経験を積めば、ある程度、放射線科医の肩代わりができるのではなかろうか。専門画像診断技師の誕生である。現在でも胃X線検査、超音波検査など、医師を凌駕する技師は幾らでもいる・・・と書かれていた。

さて、平成22年4月に厚生労働省医政局長から医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について、「画像診断における読影の補助を行うこと、放射線検査等に関する説明・

相談を行うこと」が通知されて早2年。現場はどう変わったのか。変わろうとしたのか。通知を受けて動き出しているだろうか。この通知は、現在の診療放射線技師に課して、十分に期待に込めてくれると判断して出されたものであり、我々は、この期待に応える義務がある。

本会は過去から、読影力を高める教育に力を入れてきたが、より一層会員のために読影セミナーを開催していくことを計画している。それは今まで以上に、医療に貢献する診療放射線技師を育成できないと、診療放射線技師の将来はないと感じているからである。画像診断機器の性能は上がり、使いやすくなり少ない経験でも操作可能となった。分かっている人がプロトコルを決めて、他者は装置を操作するだけとなるなら、熟練した経験と知識が不要となるかもしれない。

画像を専門とする診療放射線技師が、画像を見て「ここが異常だ」と指摘できることは当たり前であるが、画像がなくても、きちんと主治医に言葉で説明できる能力を身につけること、医師から「君はよく知っているね」だけで終わるのではなく、対等に評価されるためには読影レポートを書き、文章力、表現力を磨くしかないのである。登る山は目の前にある。そして登り方も示されている。目の前の山は相当高いが、みんなで一歩ずつ上っていこう。